The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『大鏡』における藤原隆家 ： 実仁親王・輔仁親王を視座として
Author(s)	石原, のり子
Citation	語文. 2007, 88, p. 21-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大鏡』における藤原隆家

——実仁親王・輔仁親王を視座として——

石原のり子

一　問題の所在と先行研究

『大鏡』は、藤原道長の栄華が現出した理由を、系譜を辿ることによって語る物語である。であるから、道長へと繋がる藤原摂関家嫡流の人物は、道長の栄華の必然を語らんがために、造形、叙述されており、彼等に特有の逸話が紡がれていることは周知の事実である。[1]

しかし、その中にあって兼家は、基経—忠平—師輔—兼家—道長という、道長へと繋がる直系の系譜上に位置しながら、道長よりもむしろ三条天皇との強い結びつきが繰り返し語られる人物である。一方、三条天皇は、これまで、道長に圧倒された天皇とのみ捉えられ、詳細な検討がなされてこなかった。稿者はこれまで、その二人に注目して考察を行ってきた。その結果、『大鏡』には摂関家嫡流の系譜とは異なる、兼家—三条天皇—禎子内親王という、後三条天皇へと繋がる、もうひとつの系譜が描かれていることがわかった。[2] また、三条天皇の〈声〉をめぐる記述を検討し、三条天皇は後三条天皇の〈喩〉的役割を負わされていることを明らかにした。[3]

益田勝実氏は、「『大鏡』の作者の時代は、描かれる『大鏡』の時代ではなかった。しかし、作者は、自己をフィクションによってその中に投げ入れ、描こうとする前代を〈同時代史〉的に捉えようとした。……作者は、まず、そういう作者の虚構された立脚点を設定し、同時代人としての視点を確立すると、次には、自己の最も主要な分身として、百九十歳の老翁大宅世継を登場させる。かれは分身世継を通して前代に自己を生かし、自己の歴史体験としての歴史を幻視しうるのである。百九十歳という年齢は、摂関政治の年齢であった。この発想が要求する年齢であった」[4]と述べられた。この大宅世継の年齢が摂関政治を示しているという指摘は、『大鏡』の作者および執筆意図を考える上で、非常に重要な視点であろう。『大鏡』が摂関政治史を描くために書かれたとす

れば、当然その後に続く院政が意識されていることは自明であるからである。

本稿は、それらを承け、道長の栄華という、従来指摘されてきた、表向きの『大鏡』の主題から脱却した読みを提示したい。それにあたっては、従来それほど重要視されてこなかった、藤原隆家に関する記述に注目する。

二　隆家に対する評価

中関白藤原道隆の三男である隆家は、叔父・道長との政争に敗れた人物でありながら、『大鏡』において、非常に高い評価がなされる人物として注目される。以下、隆家に関する記述を確認していく。

この帥殿［＝伊周］の御一腹の、十七にて中納言になりなどして、世の中のさがな者といはれたまひし殿［＝隆家］の、御童名は阿古君ぞかし、この兄殿の御ののしりにかかりて、出雲権守になりて、但馬にこそはおはせしか。さて、帥殿の帰りたまひし折、この殿も上りたまひて、もとの中納言になりや、また兵部卿などこそは聞こえさせしか。それも、いみじう魂おはすとぞ、世人に思はれたまへりし。

（道隆伝　二七一～二七二頁）[5]

長徳の変で左遷された隆家に対して、傍線部で示したように「魂おはす」という評価が、世間の人々からのものとして語られている。

次に挙げる用例は、眼病を患った隆家が、その治療のために大宰大弐を希望したことを語ったものである。

御目のそこなはれたまひにしこそ、いといとあたらしかりしか。……よろづにつくろはせたまひしかど、えやませたまはで、御まじらひ絶えたまへる頃、大弐の闕出できて、人々望みののしりしに、「唐人の目つくろふがあなるに、見せむ」と思して、「こころみにならばや」と申したまうければ、三条院の御時にて、またいとほしくや思し召しけむ、二言となくならせたまひてしぞかし。

（道隆伝　二七六頁）

この後、大宰府での隆家の活躍が語られるのであるが、その前に、傍線を付したように、他にも多くの希望者がいたにも関わらず、三条天皇が隆家の希望を一も二もなく受け入れたと語られていることは重要である。

隆家が、道長との対立の中で、孤独と思うに任せぬ憤懣をつのらせていた三条天皇の意向を汲み、伺候していた数少ない殿上人であったことは、『小右記』にも散見される。[6] しかし、三条天皇と隆家との関係はそれに留まらぬものがあり、この記述は重要であるが、ここでは一旦おき、後述することとする。

前の記述を承け、大宰府での隆家の手腕とそれに対する世間の賞賛が続く。

政よくしたまふとて、筑紫人さながら従ひ申したりければ、例の大弐十人ばかりがほどにて、上りたまへりとこそ申しし。かの国におはしましほど、刀夷国の者にはかにこの国

を討ち取らむとや思ひけむ、越え来たりけるに、筑紫には、かねて用意もなく、大弐殿、弓矢の本末も知りたまはねば、いかがと思しけれど、大和心かしこくおはする人にて、筑後・肥前・肥後、九国の人をおこしたまふをばさることにて、府の内につかうまつる人をさへおしこりて、戦はせたまひければ、かやつが方の者ども、いと多く死にけるは。さはいへど、家高くおはします故に、いみじかりしこと、平げたまへる殿ぞかし。公家、大臣・大納言にもなさせたまひぬべかりしかど、御まじらひ絶えにたれば、ただにはおはするにこそあめれ。この中に、むねと射返したる者ども記して、公家に奏せられたりしかば、皆賞せさせたまひき。種材は壱岐守になされ、その子は大宰監にこそなさせたまへりしか。

（道隆伝　二七七～二七八頁）

刀夷の入寇の折、隆家がめざましい統率能力を発揮し、九州の人々を従えて防戦したこと、そしてその功績は、「大臣・大納言」になってしかるべきものであるという、世次の見解が語られている。

このほどのことも、かくいみじうしたためたまへるに、入道殿［＝道長］、なほこの帥殿［＝隆家］を捨てぬものに思ひ聞こえさせたまへるなり。さればにや、世にもいとふり捨てがたきおぼえにてこそおはすめれ。御門には、いつかは馬・車の三つ四つ絶ゆる時ある。また、道もさりあへず立つ折もあるぞかし。

（道隆伝　二七八頁）

先ほど見た大宰府における隆家の働きに対して、波線部で示したように、道長が「捨てぬもの」と思っていたという。また、それに加えて、世間の隆家に対する声望も併せ語られている。これは、以下に挙げる『古事談』の説話とは一対をなしているといえよう。

後一条院未だ生まれ給はざる間、万人夜に入りて帥殿に参る。主上の一宮の叔父為るに依りてなり。後一条院生まれ給ひて後は、其の事都て絶ゆ、と云々。　（『古事談』巻一　三八）

これは、天皇の外戚となる望みがなくなった伊周に対する世間の人々の対応を、如実に物語るものであろう。しかし、夜陰に紛れることもなく、隆家邸を訪れる人が絶えないと語ることは、すなわち、隆家に対する評価の高さを強調するものであると考えてよいだろう。

以上、隆家に対する世間及び世次からの評価を確認した。続けて、隆家に対する道長からの評価について見ていく。

［隆家］あまたの人々の下臈になりて、かたがたすさまじう思されながら歩かせたまふに、御賀茂詣につかうまつりたまへるに、むげに下りておはするがいとほしくて、殿［＝道長］の御車に乗せたてまつらせたまて、御物語こまやかなるついでに、『一年のこと［＝長徳の変］は、おのれが申し行ふとぞ、世の中に言ひはべりける。そこにもしかぞ思しけむ。されど、さもなかりしことなり。宣旨ならぬこと、一言にてもくはへてはべらましかば、この御社にかくてまゐりなまし

や。天道も見たまふらむ。いとおそろしきこと』とも、まめやかにのたまはせしなむ、なかなかに面置かむかたなく、術なくおぼえし」とこそ、後にのたまひけれ。それも、この殿におはすれば、さやうにも仰せらるるぞ。帥殿［＝伊周］には、さまでもや聞こえさせたまける。

（道隆伝　二七二～二七三頁）

賀茂詣に徒歩で供奉する隆家を「いとほしく」思った道長は、自分の車に乗せ、長徳の変は自分の謀略ではないと、しつこいまでの弁明をする。そして、それを語る世次は、隆家なればこそ、道長がこのような気遣いを見せるのだと言う。

このように、道長から認められる人物が、隆家のみであることは重要である。

三　隆家の性状

前節では、世間および道長からの隆家に対する評価が如何なるものであるかを確認した。本節では、隆家の性格や言動について見ていく。まず、配流を解かれ帰京した後の隆家の振る舞いについて述べた箇所を、少々長くなるが引く。

この中納言［＝隆家］は、かやうにえさりがたきことの折々ばかり歩きたまひて、いといにしへのやうに、まじろひたまふことはなかりけるに、入道殿［＝道長］の土御門殿にて御遊びあるに、［道長］「かやうのことに、権中納言［＝隆家］のなきこそ、なほさうざうしけれ」とのたまはせて、わざと御消息聞こえさせたまふほど、杯あまた度になりて、人々乱れたまひて、紐おしやりてさぶらはるるに、この中納言まゐりたまへれば、うるはしくなりて、居直りなどせられければ、殿［＝道長］、「とく御紐解かせたまへ。ことやぶれはべりぬべし」と仰せられければ、かしこまりて逗留したまふを、公信卿、うしろより、「解きたてまつらむ」とて寄りたまふに、中納言御気色悪しくなりて、「隆家は不運なることこそあれ、そこたちにかやうにせらるべき身にもあらず」と、荒らかにのたまふに、人々御気色変はりたまへるなかにも、今の民部卿殿［＝源俊賢］は、うはぐみて、人々の御顔をとかく見たまひつつ、「こと出できなむず。いみじきわざかな」と思したり。入道殿、うち笑はせたまて、「今日は、かやうのたはぶれごとはべらでありなむ。道長解きたてまつらむ」とて、寄らせたまひて、はらはらと解きたてまつらせたまふに、［隆家］「これらこそあるべきことよ」とて、御気色なほりたまて、さし置かれつる杯とりたまひてあまた度召し、常よりも乱れ遊ばせたまけるさまなど、あらまほしくおはしけり。殿［＝道長］も、いみじうぞもてはやし聞こえさせたまうける。

（道隆伝　二七三～二七四頁）

左遷先から戻った後には、よほどのことでない限りは、隆家は外出を差し控えたという。この直前に、敦成親王（後の後一条天皇）の五十日の祝に現れた伊周への批判が述べられており、ここでも隆家は伊周とは対照的な姿で描かれているのである。

そして、道長邸での御遊に隆家が到着すると、それまで酔って乱れていた一座の者たちが、「うるはしくなりて、居直」るという態度を見せる。他を緊張させるほどの、威厳のある隆家の姿が窺える。また、道長に詔い、隆家の着物の紐を解こうとした公信に対して、隆家は機嫌を損ね、「隆家は不運なることこそあれ、そこたちにかやうにせられるべき身にもあらず」と声を荒げる。一体どうなることかと、一座に緊張が走る中、道長が隆家の紐を解くと、「これらこそあるべきことよ」と機嫌を直す。加藤静子氏は、「隆家といえども、道長にかかっては、やすやすとその懐に抱かれてしまう。道長のスケールの大きさを語る」[7]逸話であるとする。

確かに、道長の器の大きさを示すという一面もあるだろう。また、道長にとって隆家は、伊周ほど恐れるべき相手ではなかったと考えることも可能ではある。だが、これまで見てきた『大鏡』の記述を考え合わせれば、誇りを傷つけられたら、道長主催の宴の場であろうとも怒りを露わにし、筋さえ通れば、その怒りを引きずらず、場に相応しい態度に戻れるという、隆家の性格が賞賛されてもいるのではなかろうか。そうであるからこそ、「殿もいみじうぞもてはやし聞こえさせたまう」という評語が添えられているのであろう。

次の用例も、隆家の矜持を語る逸話である。

三条院の大嘗会御禊に、きらめかせたまへりしさまなどこそ、常よりもことなりしか。人の、「このきはは、さりともくづほれたまひなむ」と思ひたりしところを、違へむと思したりしなめり。さやうなるところのおはしましなり。節会・行幸には、掻練襲奉らぬことなるを、単衣を青くてつけさせたまへれば、紅葉襲にてぞ見えける。表の御袴、竜胆の二重織物にて、いとめでたくけうらにこそ、きらめかせたまへりしか。

（道隆伝　二七五頁）

甥の敦康親王の立太子がかなわず、失意に沈んでいるだろうという世間の同情と好奇の入り交じった予想をはねのけ、いつも以上にきらびやかな装束で現れたという。『小右記』[8]の当該日条に、「隆家赤練織物、左府［＝道長］被レ責レ之、」との記述がある。これによって、隆家がこのとき赤練織物を着用して臨んだこと、そして、その装束が、道長の不興を買ったことが確認できる。しかし、世次はそれを指して、「いとめでたくけうらにこそ、きらめかせたまへり」と、評している。それは、単に意匠をこらした装束をさすのではなく、隆家の矜持の高さを賞賛するものと解せよう。

以上見てきたように、隆家は、世間の人々からだけでなく、道長からも非常に高い評価を与えられ、逆境にあっても、誇りを失わない人間として描かれている。また、道長の立場から語られる隆家像も確認できた。

四　隆家からの照射

前節までで、隆家に対する評価を確認した。そこで本節では、

隆家の視点からの記述を追うこととしたい。特に、道長とその孫である後一条・後朱雀両天皇の記述を確認していく。

さて、式部卿の宮［＝敦康親王］の御こと［＝立太子］を、［隆家は］さりともさりともと待ちたまふに、一条院の御悩重らせたまふきはに、御前にまゐりたまひて、御気色たまはりたまひければ、［一条天皇］「あのことこそ、つひにえせずなりぬれ」と仰せられけるに、［隆家］「『あはれの人非人や』とこそ申さまほしくこそありしか」とこそのたまうけれ。さて、まかでたまうて、わが御家の日隠の間に尻うちかけて、手をはたはたと打ちゐたまへりける。世の人は、「宮の御ことありて、この殿、御後見もしたまはば、天下の政はしたたまりなむ」とぞ、思ひ申しためりしかども、この入道殿の御栄えの分けらるまじかりけるにこそは。

（道隆伝　二七四～二七五頁）

崩御間際の一条天皇が、敦康親王を東宮に立てることができなかったことを悔やみ、敦康の叔父である隆家だけに洩らした、「あのことこそ、つひにえせずなりぬれ」という言葉に対して、「あはれの人非人や」と言ってやりたかったと悔しがる隆家の姿が描かれている。この二人の言葉は短いものではあるが、その中には、道長を憚り、思うに任せぬ一条天皇の悲しみと後悔[9]が、そして、帝に対して「人非人」という罵声を浴びせかけたくなるほどの隆家の悔しさ、無念さが表現されている。

また、敦康親王ではなく、敦成親王（後朱雀天皇）を東宮に立てるという一条天皇の決断が、隆家の口を借りてではあるが、「人非人」の所業であると語られていることは、看過できない。しかも、世間の人々は、敦康親王が即位し、隆家が後見をしたならば、天下はよく治まるだろうと思っていたとさえ語られているのだ。万寿二年と設定された『大鏡』の語りの場で、当代であり、道長の孫・後一条天皇の御代に対する批判が、隆家をめぐる記述の中で語られていることには、大きな意味がある。

次に挙げるのは、後一条・後朱雀両天皇が、まだ親王であった頃の賀茂祭での逸話である。

この当代［＝後一条天皇］や東宮［＝後朱雀天皇］などの、まだ宮たちにておはしましし時、祭［＝賀茂祭］見せたてまつらせたまひし御桟敷の前［大斎院選子が］過ぎさせたまふほど、殿［＝道長］の御膝に、二所ながら据ゑたてまつらせたまひて、［道長］「この宮たち見たてまつらせたまへ」と［選子に］申させたまへば、［選子］御輿の帷より赤色の御扇のつまをさし出でたまへりけり。殿をはじめたてまつりて、「なほ心ばせめでたくおはする院なりや。かかるしるしを見せたまはずは、いかでか、見たてまつりたまふらむとも知らまし」とこそは、感じたてまつらせたまひけれ。院［＝選子］より大宮［＝彰子］にきこえさせたまひける、

ひかりいづるあふひのかげを見てしより年積みけるもうれしかりけり

御返し、

もろかづら二葉ながらも君にかくあふひや神のゆるしなるらむ

げに賀茂明神などのうけたてまつりたまへればこそ、二代までうちつづき栄えさせたまふらめな。このこと、「いとをかしうせさせたまへり」と、世の人申しに、前の帥［＝隆家］のみぞ、「追従ぶかき老狐かな。あな、愛敬な」と申したまひける。（師輔伝　一五九～一六〇頁）

賀茂祭を見物する両親王の姿を、大斎院選子に見せようとした道長の意向を汲んだ大斎院が、二人の生母・彰子に祝いの歌を贈る。その行動を世間は賞賛したが、隆家一人が、「追従ぶかき老狐かな。あな愛敬な」と言い放つ。このような隆家の言葉によって、後一条・後朱雀両天皇に対して、二度も瑕がつくのである。道長の栄華の礎であり象徴でもある、二人の帝を射抜くような、隆家の言動が描かれていることは非常に重要である。

また、道長の膝に抱かれる二人の親王の姿は、『古事談』に見える次の説話との類似性が指摘できよう。

一条院幼主の御時、夏の公事の日に、公卿等露台を徘徊して、南殿の北戸を披きて涼風を帯びらる。其の時大入道殿［＝兼家］摂政為り。袙を放ちて主上を抱き奉りて、掖戸より指し出ださしめ給ふに、諸卿皆な敬ひ候ふ、と云々。又た云はく、「私かに云ふ、此の儀あまりなり」と云々。（巻一　一二三）

兼家に背後から抱かれる一条天皇の姿は、その二人の皇子の姿と重なり、外祖父に背後から取り込まれる幼帝のイメージを示しているものと思われる。そしてそれは、『古事談』において、公卿たちから「あまりなり」と評されるものであるのだ。

これまでも確認したように、『大鏡』の隆家をめぐる記述において、後一条・後朱雀天皇に対するマイナスイメージの表現がなされているのは、一体なぜなのだろうか。

五　頼宗をめぐる記述

前節までで、隆家対する評価、隆家の性状、そして隆家の後一条・後朱雀天皇をめぐる言動等を確認した。ここで隆家関連の話題を一旦置き、道長の明子腹の子息・頼宗に目を転じたい。

加藤静子氏は、『大鏡』の作者を想定する上で、道長の息子・頼通に関する記述に注目された。氏によると、頼通に対する「賛美は少なく、道長の理想性と比較して矮小化されている感がある。むしろ高松殿明子腹の子息たちが目立つ活躍をする」[10]と指摘された上で、その一例として以下の記述を挙げておられる。

いでまた、故女院［＝詮子］の御賀に、この関白殿［＝頼通］、陵王、春宮大夫殿［＝頼宗］、納蘇利舞はせたまへりしめでたさはいかにぞ。陵王はいと気高くあてに舞はせたまひて、御禄たまはらせたまひて、舞ひ捨てて、知らぬさまにて入らせたまひぬる御うつくしさめでたさに、並ぶことあらじ、と見まゐらするに、納蘇利のいとかしこく、また、かくこそはありけめと見えて舞はせたまふに、御禄を、これはいとしたたかに御肩にひきかけさせたまひて、いまひとかへり、え

もいはず舞はせたまへりし興は、またかかるべかりけるわざかな、とこそおぼえはべりしか。御師の、陵王はかならず御禄は捨てさせたまひてむぞ、同じさまにせさせたまはむ、目馴れたるべければ、さま変へさせたてまつりたるなりけり。心ばせまされりとこそは言はれはべりしか。女院かうぶりたまへせば、大夫殿をいみじくかなしがり申させたまへばとぞ。陵王の御師はたまはらで、いと辛かりけり。それにこそ、北の政所［＝倫子］少しむつからせたまひけれ。さて後にこそたまはすめりしか。　（雑々物語　四〇一～四〇二頁）

東三条院詮子の四十の賀で、頼通と頼宗は童舞を舞って禄を賜る。頼通は型どおりにその衣を舞い捨てて退場し、一方の頼宗は、禄を肩にかけ、もう一差し舞ってから退場した。頼宗の師匠は人々に賞賛され、詮子が彼を五位に叙す。それを知った、頼通の母・倫子が機嫌を損ねたため、後日頼通の師にも位階が授けられたという。なぜ頼宗が、道長嫡流の頼通より優位に立つ記述がなされるのだろうか。

『大鏡』の作者が能信周辺の人物と考えられることもあり、これまで明子所生の子息たちの中でも、能信についての記述は注目されてきたが、その同母兄・頼宗については従来あまり取り扱われることがなかった。それに加えて、『大鏡』における頼宗に関する記述は、わずか二箇所に留まり、そのために注目されてこなかったものと思われるが、そのうちの一つが、頼通との比較において、称揚される意味は大きい。このことは、前節までで確認した隆家をめぐる記述とともに、『大鏡』作者の意識を探る上で重要であると思われる。

六　二人の皇子

加藤静子氏は、「平安朝期に不特定多数の読者を念頭にものを書くという行為は考えがたいから、この禎子内親王関係者、それも仮名で書かれて、帝系と藤原氏系譜の二つをつなぐというとき、真っ先に考えられるのが、国母であり、また、両家に繋がる女房たち、とくに乳母の存在である。そういう立場の人に男性社会を知らせる必要があったと推定したい。……禎子の最大の後見者、能信を思い起させ、禎子の母妍子周辺の女房を介在させ、さらには禎子同様の国母班子女王に仕えた〈歴史語り手〉世継の設定を考えるとき、どうしても禎子内親王その人か、彼女の養育した後三条院の皇子女たちを、直接間接の『大鏡』享受者として想定せざるをえない」とし、『大鏡』の作者を、藤原実政と比定した上で、「想像するに、この実政が、陽明門院や後三条院皇子女たち、ひいてはそのお付きの女房たちのために記したのが、この『大鏡』ではなかったか」[11]と述べる。また、道長以降に摂関家から男皇子が生まれた年、人物呼称、そして後拾遺集との関係の三点から、『大鏡』の成立年時を考える上で、承保二年（一〇七五）という年がポイントとなること指摘されている。

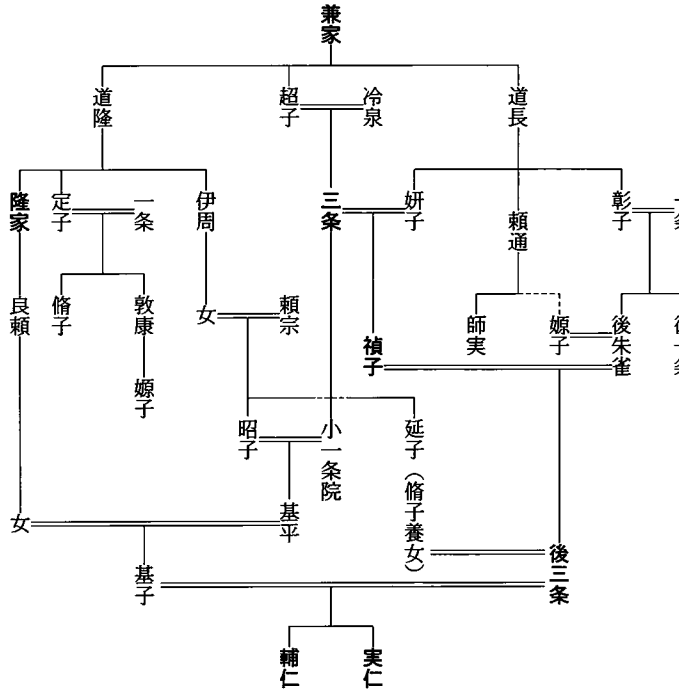
この加藤氏の指摘を踏まえつつ、道隆伝最末部の記述に注目してみたい。

この帥殿［＝隆家］の御はらからといふ君達、数あまたおはすべし。頼親の内蔵頭、周頼の木工頭などいひし人、かたはしよりなくなりたまて、今は、ただ兵部大輔周家の君ばかり、ほのめきたまふなり。小一条院の御宮たちの御乳母の夫にて、院の恪勤してさぶらひたまふ、いとかしこし。また、井手の少将とありし君は、出家とか。故関白殿［＝道隆］の御心おきていとうるはしく、あてにおはししかど、御末あやしく、御命も短くおはしますめり。今は、入道一品宮［＝脩子内親王］と、この帥中納言殿とのみこそは、残らせたまへめれ。

（道隆伝　二八二頁）

これは、物語の現在における、道隆の子孫の様子を語ったものである。まず、周家は、妻が小一条院の子女の乳母である関係から、小一条院に「恪勤」しているという。ここでまず、中関白家と小一条院との関わりが確認される。そして、次に、定子所生の一条天皇第一皇女・脩子内親王の存在が、隆家と並べて記されている。脩子内親王は、頼宗と伊周の女との間に生まれた延子（後朱雀天皇女御）を養女としており、この記述により、中関白家と頼宗家との結びつき[12]が想起されるようになっている。

そして、その延子の妹昭子は小一条院との間に源基平をもうけている。その基平と、隆家の孫娘との間に生まれたのが、源基子であるが、彼女は後三条天皇の寵愛を受けて、実仁親王・輔仁親王を産んだ。つまり、この二人の皇子は、頼宗流と隆家流の系譜が幾重にも重なりあった末に生まれた人物であり、外祖父・源基



平は三条天皇を祖とする三条源氏である。

つまり、道隆伝最末部の記述は、中関白家、三条源氏、頼宗流の結びつきを語ろうとしたものなのではなかろうか。そう考えると、第二節で述べた、三条天皇の隆家に対する厚遇の意味が明らかになる。三条天皇が隆家の大宰大弐の任官希望を即座に認めたという記述は、三条天皇もまた眼病に苦しんでいたという単なる同病相憐れむ気持ちからだけではなく、三条天皇（三条源氏）と隆家（中関白家の末裔）との密接な関わりを示すためのものと考えられるのである。

そして、延久四年（一〇七二）には、実仁親王が東宮に立っている。また、輔仁親王を次の東宮とせよという、後三条天皇の遺言があったことから見ても、承保二年（一〇七五）は、頼宗流、隆家流、三条源氏が大きな希望を持っていた時期であった。

そして実仁親王・輔仁親王は、あたかも、道長の孫の後一条天皇・後朱雀天皇のように、兄弟が二代続けての帝となる可能性を持っていたのである。このことを勘案すれば、これまで見てきた隆家をめぐる記述、及び頼宗の逸話が述べられた意味がはっきりとしてくるのではなかろうか。

実仁親王および輔仁親王は、道長の子として生まれながら、異母兄弟である頼通や教通に比べて不遇であった頼宗と、敦康親王が即位していれば、外戚となれたはずの隆家の血を引く人物である。そして何より、道長の圧力によって東宮退位へと追い込まれた小一条院の子である源基平の外孫であり、三条天皇最愛の子・禎子内親王の孫なのである。つまり、『大鏡』に影のように密やかに描き込まれた、兼家―三条天皇―禎子内親王―後三条天皇という系譜を継ぐ存在であることは明らかである。

以上、本稿では、『大鏡』における藤原隆家をめぐる記述を中心に、『大鏡』の執筆意図について考えてきた。それによって明らかになったのは、まず、道長の前には敗者であるはずの隆家に対して、語り手世次の口からのみならず、世間の人々や道長からの高い評価が語られること、そして隆家の視線を通して、道長の孫である後一条天皇・後朱雀天皇に対する批判とも言うべき記述がなされることである。そして、物語の現在である万寿二年に生存している中関白道隆の末裔に関する記述は、中関白家と小一条院家、頼宗家との繋がりを語るものであった。その三流が幾重にも重なり合った末に生まれたのが、実仁親王と輔仁親王であり、その二人の皇子こそが、兼家から始まる系譜を引く存在である。このことは『大鏡』の執筆意図を探る上で、重要な手がかりになるであろう。

『大鏡』はこれまで、その批判性を指摘されてきはしたが、やはり、道長の栄華を語る物語として考えられている。確かに、数々の逸話やその配列などからは、道長の栄華の解明と称揚が企図されていることは明らかである。しかし、院政期に成立したと考えられる『大鏡』が、摂関政治史を語ろうとしたことから考えても、また、物語冒頭で語り手世継が、道長の栄華を語ると、はっきりと断言しているにもかかわらず、兼家を起点とする、三

条天皇―禎子内親王―後三条天皇という、もうひとつの系譜が存在することから見ても、〈主流〉〈傍流〉という二項対立的な読みからの脱却が必要であることは明らかであろう。実仁親王と輔仁親王の存在を視座として『大鏡』を検討しなおすことによって、『大鏡』の新しい読みが可能になるのではなかろうか。

注

（1）福長進氏「逸話と系譜―『大鏡』の歴史叙述―」（『文学』第55巻10号・岩波書店・一九八七年一〇月）に詳しい。

（2）拙稿「『大鏡』における兼家と三条天皇―もうひとつの系譜―」（『中古文学』第76号・二〇〇五年一〇月）

（3）拙稿「『大鏡』における天皇の〈声〉―一条天皇と三条天皇を中心に―」（『詞林』第38号・二〇〇五年一〇月）

（4）「虚構〈同時代史〉の語り手―『大鏡』作者のおもかげ―」（『国文学　解釈と教材の研究』第11巻2号・一九六六年二月に初出、『益田勝実の仕事2　火山列島の思想』ちくま学術文庫・二〇〇六年に再録）

（5）以下、『大鏡』本文の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。なお、本稿においては、古本系に見られる記述を解明することを企図しているため、異本系・流布本系にのみ見られる増補記事は、ひとまず調査の対象外とする。

（6）加納重文氏「三条天皇―『小右記』の記事を中心にして―」（『講座平安文学論究 第7輯』平安文学論究会編・風間書房・一九九〇年）に詳しい。

（7）新編全集頭注。二七四頁。

（8）『長和度大嘗会記』所引『小右記』（『大日本古記録』・岩波書店）。当日の装束は以下の通り。（〈　〉内は割注）

節下大臣［＝公季］・番長歩行、〈近衛同〉、蠻絵衣・ツ、シ下重・スソコ袴・イチヒ沓、〈平胡簶〉、
公卿唐鞍・餝剱・魚袋、
衛府公卿螺鈿剱、是故実也、
四位・五位倭鞍・杏葉・鞦、佩魚袋、
近衛次将、馬頭・助乗二官馬一者、不レ結二唐尾一、不レ付二杏葉一、
左府騎馬、府生二人騎馬在レ前、番長以下歩行、〈供奉行幸装束〉、
依臨暗女御代不レ立二車幄一退帰、
左府子息着二織物下襲一、〈古伝不可然〉、
隆家赤練織物、左府［＝道長］被レ責レ之、
次第司長官雖二衛府一不レ帯二弓箭一、手振不レ着二半臂一、〈依二左府命令一着、近代例歟、不レ聞事也〉
天慶、故殿［＝実頼］節下大臣、手振不レ著二半臂一、見二御日記一、

実資は、道長の子息たちの装束について批判している。

（9）注（3）所掲拙稿において述べた。

（10）新編全集「解説」

（11）「『大鏡』成立年時の想定」（『王朝歴史物語の生成と方法』Ⅳ『大鏡』諸本研究が拓く地平・風間書房・二〇〇三年）

（12）道隆の孫・道雅と頼宗との関係については、井上宗雄氏「右京大夫道雅」（『和歌文学研究』第31号・一九七六年六月に初出、『平安後期歌人伝の研究 増補版』・笠間書院・一九八八年に再録）、関口力氏「荒三位藤原道雅考」（『國學院大学大学院紀要』12輯一九八一年三月）に詳しい。

※本文の引用は、『大鏡』は新編日本古典文学全集（橘健二・加藤静子校注・小学館）に、『古事談』は、新日本古典文学大系『古事談 続古事談』（川端善明・荒木浩校注・岩波書店）に拠った。なお、［　］内は私に補った箇所、……は省略した箇所であり、傍線も稿者が私に

付したものである。

—本学大学院博士後期課程—